生活の見通しが心の安定を生み、豊かなことばを引き出していった実践

友だちといっしょに生き生きと生活する子をめざして

小　坂　祥　子

はじめに

今年度、本校に入学してきた本児は、多動で一時もじっとしていることができない。目に映る全てのものに少しは関わるがすぐにあきてしまい、ふらふらと動き回って着席行動もほとんどとれない状態であった。また、自分の思うようにならないと大声を出しパニック状態となった。発することばは、わずかな単語を一方的にしゃべり、相手とことばや気持ちのやりとりをするといったコミュニケーションの形とはほど遠い状態であった。

そのような本児が学校生活に少しずつ見通しを持ち、学級の先生や友だちと楽しく学校生活を送り豊かな生活経験を積み重ねていく中で、精神的な落ち着きを見せ、めざましいコミュニケーションの力の高まりを見せていった。ここでは、その本児への取り組みと変容の過程について述べてみたい。

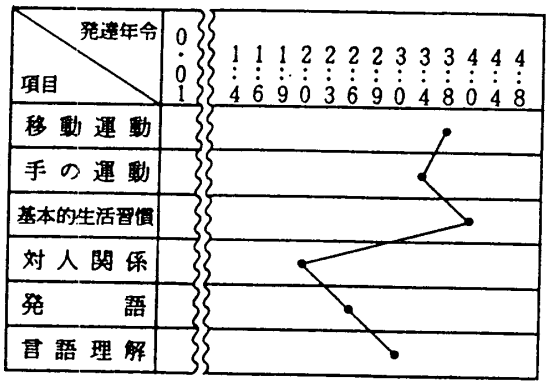
1　プロフィール

(1)　生　育　歴

- 昭和62年９月11日生　７歳２か月　小学部１年　女子　超未熟児出産　体重950ｇ
- 生後８か月まで保育器に入る　出産後、腸管穿孔のため手術　首のすわり１歳　歩行２歳
- 弱視で２歳からコンタクトレンズを使用　ペテルス病治療のため今年度12月から装具着用
- ６歳時、全面的な歯の治療をしてから少しずつことばが出はじめる。
- Ｔ療育園通園２歳～２歳７か月　心身障害児通園施設３歳～６歳６か月
- 家族は両親と妹（保育園年中組）の４人家族　入学１か月後母親は仕事を断念、本児との関わりを大切にするよう努める。本児の教育について非常に熱心であり、本校の教育に深い関心をもつ。

(2)　諸検査による実態

- 右図のように遠城寺式乳幼児発達検査（H6.5実施）では、2:0～4:0歳の発達を示している。
- 基本的生活習慣と移動運動は高い値を示しているが対人関係、言語面での落ち込みが見られる。



遠城寺式乳幼児発達検査

(3)　コミュニケーションに関する実態

- 相手を意識しない、一方的なおしゃべりが多い。
- 要求等は叫び声やクレーン現象で伝えようとする。
- 聴覚刺激に対する模倣能力が高い。
- 言語理解能力は比較的高く、教師の言語指示を聞いて行動することができる。

(4) 行動特性

- 見通しのたたない場面では多動で、集団行動がとりにくい。
- 気せりで次々と行動することを好み、待つことが苦手である。
- 自己中心性が強く、思い通りにならないと大声を出したり、床に寝転んで抵抗したりする。
- 興味のあることに対しては、短時間であるが集中して取り組む。

2 取り組みの構想

個人目標　友だちといっしょに見通しをもって生き生きと生活する子

↓

仮説

本児は生活の見通しのたっていない場面では不安で多動になり、少しでもしたいことを拘束されると大声を出し、集団の規律を守りながら行動することを苦手としている。しかし、生活の見通しがたち精神的な安定が図られた場面では、落ち着いて自分の力を発揮しながら生活することができる。本児にとって一番身近な親や教師がよき理解者となり、生活に見通しを与えながら、親密な信頼関係のもとに豊かな生活経験を積み上げていくことで、本児の総合的な発達が促されていくものと考える。今後、どんどんことばを獲得していくことが予想される本児にとって、精神的な安定を保ちながら充実した豊かな生活経験を与え、よい言語環境を整えていくことが効果的なことばの指導にも通じるものと考える。そのような日常の生活の積み上げの中で、本児は自分の力を出し、友だちといっしょに生き生きと生活していけるものと考える。

↓

コミュニケーションに視点をあてた取り組み

コミュニケーションの目標　友だちや先生と少しは感情やことばのやりとりができる子

↓

指導方針
①教師や親は受容的・共感的に本児を受け止め、精神的な安定を第一に考える。
②豊かな生活経験を準備し、先生や友だちと共に生活し共感し合う中で、日常的な生活を通してことばの指導を行う。
③言語的環境（言葉かけ、教室環境、教材提示）を整え、本児の興味づけをはかりながら語彙や文字の獲得をねらう。
④指導の方針をはっきりと家庭に知らせ、共通理解のもとに指導していく。

3 指導の実際

日常の生活の中で、本児の心の安定に努めていった実践

本児は見通しのたたない場面や環境の中では、どう行動したらよいかわからず多動となり、心のよりどころとなるものを求めて甘えたがる。しかし、自分の信頼できる人に守られ、安心した精神状態

の中で、することの見通しがたつと、実にスムーズに行動することができる。発達年齢的にいっても、まだ本人の発信をしっかり受け止める心のよりどころとなる存在が必要である。そこで、家庭では母親が、学校では担任が、一番安心できる存在になることに努めた。精神的に安心できる場で、安心できる人に対してこそ、伝えたい意欲もわき、共に心を開き合って自然なコミュニケーションが成立していくものと考える。

(1) 先生や学級の友だちの中で育てる

- 学級は何でも話せて安心できる場にすること。
- 担任と子どもたちが強い信頼関係で結ばれること。
- 共に生活し、共に活動し、いろいろな感動を共有する中で場面に応じた話しかけに努める。
- 奇声やクレーン現象ですませていたことをきちんとことばにおきかえて知らせるようにする。
- 自制できずパニックを起こしそうな時には、「がまん、がまん」「順番ね」「今は座ろうね」等のことばかけをし、態度と今することを知らせる。

本　児	教　師
ジャンパースカートがはけず教師の目の前に差し出す	「先生助けて」って言うと先生にもよくわかるよ。
先生助けて。	はい。こうしたらいいよ。
ありがとう。	どういたしまして。

本　児	教　師
自分から先にトランポリンに行こうとする。	順番、順番、待とうね。（体をもって止める）
順番、順番。	そう、Ｙちゃんの次ね。
順番　（何度かするうちに納得する）	

(2) 生活に見通しをもたせる

- 朝の会や１日の流れをパターン化し、あまり変更しない。
- 同じ活動を繰り返し、できる喜びを味わわせる。
- 絵や視聴覚的教材を利用して、１日の生活の流れをわかりやすく提示する。
- 学校生活や行事等について、本児の喜びそうなテープを作成し、事前に内容を伝えておく。

(3) 母親の変容

本児が入学した頃の４月～５月上旬にかけて、母親は本児を学校に送ると勤務先に急ぎ、仕事をしていた。気せりで、ゆったりと本児の要求や願いを受け入れないまま指示をしたり、命令口調でいらいらしながら本児に接することも多かった。本児が５月中旬頃体調をくずしたり母親を求める姿を見たりして、母親は仕事をあきらめた。それを機会に担任からも母親に対して、本児の気持ちをくみとりながらていねいに対応してもらい、本児にたくさんの時間をかけて接してもらうようお願いをした。

〈お願いしたこと〉

- お母さんがゆったりとした気持ちで寛容に本児に接して下さい。
- 本児の気持ちをくみとり、ていねいに対応して下さい。
- 奇声やクレーン現象に対しては、ことばで言い方を教えてあげて下さい。
- 努めて絵本を読んであげる機会をつくって下さい。
- 生活場面に合ったやさしいことばかけに努めて下さい。

※担任からのお願いの聞き入れというだけでなく、母親が少しずつ変わっていった要因として　①保

護者同士の話し合いの中で　②本や講演等の学習を通じて　③担任や他の保護者の子どもたちへの接し方を観察して　④担任と何でも話せる信頼づくりを基盤として　⑤主治医の先生からも同じことを指摘されて、といったことも大きかったことをつけ加えておきたい。

	本児の様子	母親の様子		本児の様子	母親の様子
4月	一方的なおしゃべりが多く、話しかけても「Mちゃん、お母さん、だって」を繰り返す。目が合わず、多動。少しのことにいらいらし、パニックを起こす。	本児の行動が待てず、すぐに口出しをする。命令口調が多い。	9月	にこやかな笑顔が増える。ひとつの行事に一生懸命取り組み、十分に活動しきる。その後で心のこもった感情的なことばが出るようになる。	母親の反省的な言葉が聞かれ、本児に寛容に接するようになる。
5月	体調の不調がある。学校が好きで、行くことを楽しみにするようになる。少しずつ生活に見通しが持てるようになる。	仕事をやめ、本児と接する時間が増える。	10月	場面に即した会話が少しできるようになる。他の学級の先生とも少し遊べるようになる。	母親に笑顔が増え担任に何でも気軽に話す。
6月	生活のリズムがわかり、パニック状態が減る。絵本の読み聞かせを喜ぶ。少し長い間、好きなことに取り組める。	学校からのお願いや学校行事に対して協力的になる。	11月	ペテルス病のため長期欠席。電話の応対が慣れた人に対して少しできるようになる。留守番が少しだけできるようになる。	学校と絶えず連絡を取り合い、家庭でゆったりと本児に接する。
7月	暑さのため体調をくずし、母親に甘える。少しの指示で「はーい」と言って次々と行動できる。	本児の甘えを受入れ、体調の改善に全力を注ぐ。	12月	下旬頃から装具を着けて登校するようになる。先生の指示をよく聞き、落ち着きが増す。	本児のことを一番に考え、学校生活が送れて喜ぶ。

生活を楽しみ、十分に活動しきる中でより豊かに育っていった実践

ひとつひとつの学校生活を十分に楽しみきり、満足して活動していく体験を積み重ねていくことは人間関係を豊かにし、総合的な発達を促すとともにコミュニケーションの力をも高めていけるものと考える。本児が生き生きとした学校生活を送っていけるように次のような取り組みを行った。

(1)　生活単元学習の取り組み

- 本児の答えやすい発問の用意
- 教材の工夫　・気持ちの盛り上げ
- 集中できる環境づくり
- 満足するまで活動させる
- 先生や友だちと共に楽しむ
- 家庭も一緒になって取り組む

(2)　「遊びの時間」の取り組み

- 興味のもてる題材の選定と場の工夫
- 言葉のやりとりが期待できる場の設定をする
- 満足いくまで遊びきらせる

(生活の中で出てくるようになったことば)

教室を出る時　「ちょっと行ってくるわ」
遊びの時間の後で　「わあ～、おもしろかった」
あやまちに気づき　「あ、まちがえました」
友だちを気づかって　「だいじょうぶ？」
プール学習の後で　「気もちよかったね」
劇練習の時　「あ～ざんねん」等々

(本児と教師との会話)　～お菓子屋さんごっこで～

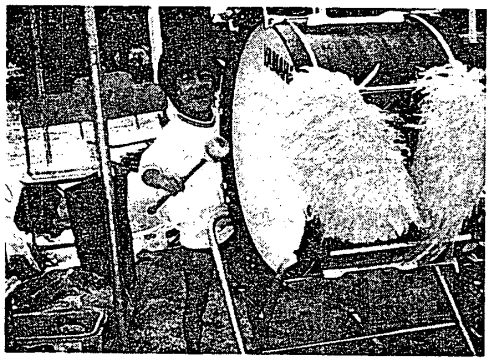
本　児	教　師
こんにちは。	
あの、すいません。 →	はい。
これください。 →	何？チョコレートですか？
チョコレートください。 →	はい、どうぞ。
ありがとう。 ←	(渡す)
じゃあ、さようなら。 →	さようなら。
あ～よかった。	

(3) 自由遊び、休憩時間の利用

あちこちと興味深く動き回る本児は、10月頃からしだいに学級内だけでなく学部内へと行動範囲を広げていった。休憩時間を利用して、本児は高学年の友だちや他の学級の先生と交流し、コミュニケーションの輪を広げていった。

本　児	他の学級の先生
K先生、こんにちは。→	Mちゃん、こんにちは。
Mちゃん自転車乗る。←	自転車に乗る？
（またごうとする）	足はここにかけて。
はーい。←	つかまっててね。
	（乗せてもらう）
うん。←	はい、もう降りようか？
ありがとう。←	じゃあね。
いってらっしゃい。	
（先生に手を振る）	

友だちといっしょの楽しい朝の会



学校大好き、生き生き笑顔

4　本児の変容

- 本児は、４月当初は一方的な単語の羅列だけで、相手とことばのやりとりがほとんどできない状態であったが、２学期初め頃から慣れた人になら少しことばのやりとりができるようになった。
- 教師や友だちといろいろな生活を経験していく中で、「おもしろいね」「よかった」といった感情的なことばが自然に出てくるようになり、生活に即して使えることばが増えた。
- 学校を楽しみにし、笑顔が増え、何事にも生き生きと取り組む姿が見られるようになった。
- 生活に見通しがたち出し、順番を待つことや我慢することもわかりだし、しだいに落ち着きが出てきた。

5　考察と今後の課題

生活化・統合化を図りながら、日常の実際的な生活の指導を通してことばやコミュニケーションの力を高めていく取り組みは、未発達な段階の本児にとって、大変有効であった。１年生に入学して、慣れない環境で不安定な本児に生活の見通しを持たせることで、しだいに精神的にも安定し、自分の力を発揮することができだした。それと同時に母親に理解を求めながら、学校と家庭が同一の指導方針のもとに取り組んだことで、本児はコミュニケーションに限らずあらゆる面で、めざましい発達をとげることができた。子どもの発達において母親や教師の関わりの重要性を改めて確認する思いがした。

学校が楽しい、好きな先生や友だちがいる、自分が受け入れてもらえるといった環境の中で、充実した生活をし、満足のいく活動を繰り返していくことが、豊かな発達を促す基本であると思う。超未熟児で生まれた本児は体調のコントロールが難しく故障も多いが、より豊かな生活経験を準備し、より豊かに関わっていくことが今後も大切であると思う。